

『学問のすすめ』

福澤諭吉 著 佐藤きむ 訳 角川ソフィア文庫 700円(税込)

100年以上経て未だ錆び付かぬ思想
平易な口語訳で読み易く

会員 加藤 卓也 (58期)



明治の啓蒙思想家、福澤諭吉——。その代表的著作といえば『学問のすすめ』である。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと言えり」という冒頭の一節は有名でも、全17編を原著のまま読まれた方は多くないかもしれない。本書は、これを平易に口語訳したものである。

もともと『学問のすすめ』は、当時としては異例の通俗文で書かれたものだった。それがこの口語訳で現代の我々にも読み易くなり、福澤が上手い例え話を織り交ぜて熱心に演説するのを聞くかのようなようである。そしてこの演説は、学問を続けるべき弁護士にとって、その一身を省みる切っ掛けに満ちている。

例えば、福澤の学問に対する指向を示す言葉に「実学」というものがある。これは、昨今流行りがちな、手っ取り早く使える知識の習得をいうものではない。実社会で本当に役立つ学問を修めるためにはどうすべきか、その姿勢・思考のあり方を説いている。

また、福澤は、一旦は学問を志しながら、目先の安

楽のために易きに流れる人のあることを嘆いている。半ばの学業をして風を読めば、我が身の生活を潤せるかもしれない。しかし、そういう風潮が蔓延れば、それこそ本人と世間の損失だというのである。

『学問のすすめ』は135年前の著である。けれども、福澤が呼び掛けたその趣旨は未だ錆び付かず、それどころか、現代に生きる者に対して、果たしてどれほど進歩できたのかを今なお問うているかのような

とはいえ、結局の主題は、学問をすればどんな良いことがあるかを説いて励まし、勇気付けるところにある。ぐうの音も出ないお説教であれば却ってやる気を挫きかねないが、その辺りは安心して大丈夫である。

ところで、本書を読んだ頃、丁度、東京国立博物館で「未来をひらく福澤諭吉展」が催されていたので足を運んだ。本稿掲載の頃には会場を福岡市美術館に移している。彼の地へ出張のある方には、道中で本書を捲りつつ、こちらにも是非立ち寄りたい。